

荒木徹先生の思い出

町田 忍

荒木先生は、太陽惑星系電磁気学講座（旧地球電磁気学講座、以下「講座」と記す）の担当教授を務めるとともに、地磁気世界資料解析センター（以下「センター」と記す）の責任者・センター長を併任され、教育研究および関連分野の発展に著しく貢献してこられました。前の勤務先である宇宙研から京都大学に異動してきた私は、先生より教育者・研究者としての心構えをはじめ、学内外における活動について数多くのご指導とご助言をいただきました。先生から賜ったご厚情とご教示に対し、心より感謝申し上げますとともに、そのご恩は今も忘れることができません。

そのような私が、在職時、先生からよく伺ったのは、グループをいかに発展させるかということでした。各年度の最初のゼミでは、長谷川万吉先生から始まる講座・センターの歴史を、A4用紙にびっしりと書き込まれた資料をもとに説明され、われわれが進むべき方向を示されました。われわれは皆、その内容を理解し、互いに確認し合いました。同時に、そのゼミでは各人が前年度の総括を行うことが慣わしで、具体的には、研究の進展・成果、学会や研究会での発表、公表した論文、コミュニティへの貢献、さらにスタッフについては競争的資金獲得の実績などについて報告し、その上で自己評価と、それを踏まえた新年度の計画を述べるというものでした。荒木先生はこれらについても詳細な資料を準備され、包み隠さず内容を公表されました。私などは、科研費などの競争的資金の獲得において、なかなか実績を上げられなかった時など、なかなか発表しづらいこともありましたが、かえってそれがよい刺激となり、優れた成果を挙げて資金の獲得につなげようという意欲をかき立てられたことを思い出します。荒木先生は、その効果も見通したうえで、一人一人が目標を明確にし、責任を持って行動することを促すために、斯様な方法を導入されたのでは

ないかと察しています。実際、先生ご自身も研究が思わしくない結果となったことや、資金の獲得に失敗したことなどを率直に公表されました。そのような姿勢から、私は多くを学ばせていただきました。

普段のゼミでは、各自が取り組んでいる研究課題の進展の具合や課題に関連した論文のレビューなどが行われましたが、荒木先生からは、太陽風動圧が急激に上昇した際に発生する磁気嵐の急始部 (SC or SSC) の研究に関する成果を多くうかがいました。学会や研究会の限られた時間ではなかなか触れられない深く専門的な考察、背景にある事柄について詳細をうかがうことができました。特に、SC に伴う地上磁場変動の微細な構造、磁気圏・電離圏をグローバルに流れる電流の空間分布および時間変動に関して、先生の提唱されたモデルの詳細を直接うかがうことができたのは大変貴重で有益な機会でした。物理的な法則を基礎に、自然現象と真摯に向き合い仕組みを理解する姿勢の大切さを、われわれは先生から学びました。

グループの発展ということに話を戻して、さらに思い出されるのは、センターにおいて世界中で広く用いられている AE インデックスを算出して公開するという、大きな負荷のかかる業務に関することです。この業務は専門知識を最大限に活用して実施する必要があるため、人的・資金的支援を求めて文部科学省に足しげく通い、粘り強く訴えておられました。そのような先生の粘り強さと熱意に深い敬意を抱いておりました。

同じ観点でもう一つ思い出されるのは、データ関連の事柄で交流のあった九州大学の有川節夫先生が研究代表となった科研費特定領域研究において、荒木先生が班長を務められたことです。その研究テーマのキーワードは、現在の AI の隆盛にもつながる「発見科学」でした。当時の院生の中には、この分野の手法に興味を持ち、自らの研究への応用を試みた者も少なくありませんでした。また、このことを契機として、講座の優秀な複数の卒業生が統計数理研究所に職を得て、現在も SGEPSS と深い関わりを持ちながら分野を牽引し活躍してく

れています。これもまた、卓越した先見の明を持っておられた荒木先生の大きな功績の一つであると思われます。

先を見通す能力という点で言えば、先生は以前から中国からの研究者の来訪や留学生の受け入れを前向きに考えておられ、実践してこられました。バブル期を迎えて少し経った頃、生協の食堂で先生と食事をしている際、「日本の成長はこれまでで、これからは中国が躍進する時代がやってくるはずです。だから今できることを彼らにしてあげて、お互いをよく理解し信頼関係を築いておくことが肝要です。」とおっしゃったことをよく覚えています。当時の私にはその言葉の意味を十分に実感することはできませんでしたが、現在、米国と肩を並べるほどに発展した中国の姿を見るたびに、先生の言葉を思い出します。先生の将来を見通す力には、心から感服するばかりです。

そういえば、研究室に配属された学部生や院生と連れ立って最寄りの生協食堂でよく昼食をとりました。また、講座とセンターで構成されるグループでは、スタッフが集まって世間話をしたり、必要に応じて喫緊の課題について話し合いながら昼食をとることがありました。（今も続いている習慣ではないかと思えます）先生と過ごしたそのような時間も懐かしく思い出されます。

皆で集まる機会は他にも多くありました。例えばスタッフ間では各人の誕生日に集まってケーキを囲んで祝ったり、学生も含めた全体の集まりとしては恒例の新歓コンパ、暑気払い、忘年会、新年会などがあり、荒木先生を囲んで多くの楽しい時間を過ごしました。中でも私がよく覚えているのは、京大に赴任したばかりの頃、理学部4号館の屋上で開かれたビアパーティーです。そこからは五山を一望することができ、暗くなるまで皆で語り合いました。その思い出は、今となってはかけがえのない財産です。

またある時、本地球物理学教室同窓会（知球会）とは別に、講座の卒業生と旧スタッフ、そして現役の学生・スタッフが参加するグループ内の同窓会が開か

れたことがありました。私は同窓会そのものも楽しかったのですが、なぜかその翌日の午前中に参加者を募って大学に集合し、その足で銀閣寺の参道を通じて大文字こと如意ヶ嶽に登頂した出来事の方を、より鮮明に覚えています。荒木先生はほとんど絶えず先頭を歩かれました。山頂に到着して見下ろした京都の街並み、それを囲む山々、そして青空に浮かぶ真綿のような雲と、それらが地上に落とす影が整然と隊列をなしてゆっくりと動いていく光景は、先生の生き生きとした姿とともに、今も忘れることができません。

皆で集まるという関わりでもう一つ思い出されるのは、講座を卒業された、ある方の結婚披露宴に招かれて先生と同席した時のことです。私はちょうど先生の隣の席に新郎側の来客として座っていました。開会の宣言の後、新郎新婦が入場してきたのですが、その時先生はなぜか隣で小さな紙片（確か卓上にあったナプキンであったと思います）に忙しくメモを書き付けておられました。やがて司会者から主賓挨拶の案内があり、荒木先生が壇上へ向かわれたので、私は少し驚きました。主賓として挨拶をされるのに、ずいぶん直前に話の準備をされるのだなあと思ったからです。

しかし、さすがは荒木先生でした。壇上では落ち着いた様子で堂々と新郎新婦の紹介と祝辞を述べられ、披露宴は華やかに幕を開けました。ただ、その間、手元の式次第には主賓として別の方の名前が記されていたので、私は内心不思議に思っていました。後で席に戻られた先生に伺うと、主賓の方の到着が遅れることになり、急遽、先生が代理として挨拶を依頼されたとのことでした。

この出来事は、さすがの先生にとっても突然のことで相当慌てられたようです。しかし同時に、先生にとっては楽しい成功体験でもあるとともに、その後、新郎新婦が素晴らしい家庭を築き、お互いが優れた研究者として大活躍してくれていたからでしょう、折に触れて嬉しそうにこの時の話を語っておられました。

そのように心温まる時間を過ごされる一方で、先生は講座とセンターを併任し、教育研究活動に加えて学内外の各種委員、役員、学会長など数多くのアドミニストレーション業務を担われ、極めて多忙な日々を送っておられました。それにもかかわらず、すべての人に平等に接し、決して自らを甘やかすことなく、常に姿勢を正し、高邁な理念と道徳心を持って行動されていました。先生は必ずしもそれらを言葉にして語ることはありませんでしたが、その清廉で気高い人柄は自然と周囲に伝わっていました。私もそのような先生を手本として日々を過ごしてきましたが、ついに先生の境地に近づくことはできませんでした。

先生は常にある種の危機感を抱きながら、わが国における地球電磁気学の発展に寄与する地磁気世界資料解析センターのあるべき姿について明確なビジョンを持ち、その運営と機能の充実、さらには技術の進化と組織の発展に力を注いでこられました。晩年に至ってもグループのゼミに参加され、中国などにも渡航して共同研究や学術交流を続けておられました。研究活動に対する情熱が衰えることはありませんでした。

そのような先生を失ったことは、私たちにとって計り知れない痛手です。ここに改めて荒木先生のご冥福を心よりお祈りするとともに、先生の志を語り継ぎ、この分野をさらに発展させていく夢を、次の世代の若い人々に託したいと思えます。



理学部 4 号館屋上におけるビアパーティー